

2014年度卒業論文

学習者の視点から提案する日本語学習
～教える喜び、教わる楽しみ～

<目次>

- I. はじめに
 - A. 研究動機
 - B. 先行研究
 - C. 研究方法

- II. クイーン・マーガレット・カレッジ
 - A. 学校概要
 - B. タイムテーブル
 - C. 行事

- III. 日本語教育
 - A. 教育制度
 - 1. 学校のシステム
 - a. 必修科目
 - b. 大学受験
 - c. 個人を大切にする授業システム
 - 2. 子どもに合わせる
 - a. 異学年のグループ活動
 - b. 毎日の積み重ねが成績の積み重ね
 - 3. システムに対応する教材不足
 - 4. インターナショナル・バカロレア
 - a. External assessment
 - b. Internal assessment
 - B. 授業内容
 - 1. 漢字
 - a. 漢字を教える難しさ
 - b. 教える方法
 - 2. 日本の伝統文化
 - a. 資料や本がそろっている
 - b. イベント・展示会での日本文化の紹介
 - c. 日本の雑貨屋
 - d. 全部日本の食品だと思っていた
 - 3. 日本のレジャー
 - a. 祝日の過ごし方
 - b. 交通機関
 - 4. テクノロジー
 - a. 日常生活のテクノロジー
 - b. 学習のテクノロジー
 - C. 教材
 - 1. インターナショナルバカロレア (IB) のための教材
 - a. インターネットからの教材の問題点
 - b. 新聞や雑誌をリソースにする
 - 2. 学習者のニーズに合った教材の開発
 - 3. オンラインを使った人材・教材の開発

- D. 授業形態
 - 1. 会話クラス
 - 2. 個別指導
 - 3. 絵本やDVDをつかった授業
 - 4. 長期休暇中のワークショップ
- E. 授業以外の課題
 - 1. 課題と学習意欲の引き上げ
 - 2. スピーチ・コンテスト
 - 3. サブカルチャー、ポップカルチャーがもたらす学習動機、モチベーション維持
 - a. アニメを通じた日本の若者理解
 - b. 漫画の人気
 - c. キャラ弁を作る生徒
 - d. ファミリーレストランとバイキングに憧れる
 - e. コンビニエンスストアとスーパーマーケットの差
 - f. 食品サンプルをもって帰りたい
- F. 山口県立大学での留学生チューターとして
 - 1. 日本語能力試験への挑戦
 - 2. 授業のサポート
 - 3. 文化体験
- G. クラスの運営
 - 1. 学習者のレベル差に対応した授業
 - 2. アシスタントの立ち位置
 - 3. クラスでの教材
 - a. 文字カード
 - b. 絵カード
 - c. 歌
 - d. 映像
 - e. 画像

IV. 討論

- A. まとめ
 - 1. 自己が尊重される教育制度
 - 2. 一緒に学び、つくる授業
 - 3. アシスタントの仕事
- B. ティーチングアシスタントの心構え
 - 1. 自分なりの先生像をもつこと
 - 2. 臨機応変であろうと努めること
 - 3. なるべく先入観をもたないこと
 - 4. 生きた教師が最大のリソース
- C. 今後の課題

謝辞

引用文献

引用 Web ページ

I. はじめに

A. 研究動機

私は日本語ティーチング・アシスタントとして2013年4月から9ヶ月間、ニュージーランドのウェリントンにある中等教育機関で働いた。このときの現場でのいろいろな気づきを、今後の実習や私自身の進路にも生かしてみたいと考えた。私が大学生であり、同時にアシスタントという立場に立ったことは、学習者である生徒と、立場も年齢も近いと考えられる。現在の授業内容や授業形態は効果があるのか。補助教材は充分か。容易に購入することができるか、生徒が求めているものは何か、どのようなものが求められているかを学習者の立場と学習者の視点の双方向から再検討し、提案する。

B. 先行研究

これについては、横田（2003）の『外国人児童に対する日本語教育のあり方』や平畑（2007）の『海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化——海外教育経験を持つ日本人日本語への質問紙調査から』が有名である。しかし、中等教育機関を対象にしたものに比べると比較的少ない。

自律学習は、学習者が目的、方法、現状などにたいして、自らの学びを問うことであり、自律学習における教師の役割は、学習のきっかけやひと押しをすることなどである。それらは、学びの段階において異なり、必要に応じた支援をすることを常に見極めなければならない。自律学習を育む学びとは、教師が一方的に何かを与えるだけでなく、教師と学習者が一緒に答えを導き、そこまでの学びのプロセスを共有することが大切である。そして互いに共有することによって、それぞれの立場から学び合う場が必要であると考えられる。これは尾関（2007a:185-92）が同じような指摘をしている。

学習者にとって教師は大切な生きた教材であり、学習者が自立的学習ができている、どうか、確認をする役割を担う。それによって、より学習者の自律的学習を促すことができる。梅田（2005: 74-5）は、教師の役割を以下のように述べる。

言語学習に限らず、学習者が自律的に学習を進めようとする場合、誰かに相談したり、示唆を受けたり、励まされたりする機会が望ましいだろう。その相談相手が受容的・非審判的な態度で接し、精神的な私語学習に限らず、学習者が自律的に学習を進めようとする場合、誰かに相談したり、示唆を受けたり、励まされたりする機会が望ましいだろう。その相談相手が受容的・非審判的な態度で接し、精神的な支えとなりつつ、専門家として適切な助言を与えてくれるなら申し分ない。

そうした役割は、必ずしも教師の役割とは限らないが、重要な人的リソースの1つと言えよう。例えば、「学習管理者」が単に、計画通りに進行しているかどうかを記録するだけでなく、その学習計画や学習の方向性が目的や個別の状況に対して適切かどうかをチェックしたり、より適切な方向について助言したりする役割も持てば、まだ自己決定的でない学習者もより自律的に学習を進めることができる。

青木・尾崎・土岐（2001: 182-97）が語っているように、自主的・自律的な学びの過程がなければ、いくら教師が「教え」ても「学び」にはつながらないというのは大切な気づきだ。

「教えたのにできない」とか「教わったけど忘れた」とか言っている人たちは、「教える」という言葉をおそらく「言う」とか「見せる」とかいう意味で使っているのだと思われているのだと思います。（中略）ここには、学習が成り立つための認知のプロセスへの視点が欠如しています。学習を引き起こすためには、まず自分が言ったりやったりしようとしていることが、ある人の学習にとって今ここで必要か、という判断をする必要もありますし、言ったりやったりした後では、相手が聞いたか見たかを見届ける必要もあります。さらに、聞いたか見たか

りしたことを、相手はどのように理解したかを知ることが必要です。そして、安心して考えたり練習したりする時間を作ってあげることも大切です。

これをさらに敷衍して、尾関（2007b:21）は子どもたち自身が、主体的な学びを行うことが、語学ができる、できないよりも重視すべき点であるとささ述べている。

子どもたちにとってのことばの学びとは、単に日本語が出来る、出来ないといった能力的な問題だけではなく、そこで本人にとって主体的な学びがおきているかどうかということが重要であることがわかる。主体的な学びがおきていないのであれば、その力は子どもにとってすぐに忘れ去られてしまう、単なる表面的な外国語の知識に留まってしまう。しかし、自分を表現するための根源的なツールとして主体的に獲得したことばは、生涯子どもを支える力として生きていくのである。それゆえ、このような力はその子どもの母語にも、またその他の様々な能力の発達にも転移しうると考えられる。

そうであれば教師の使う教材や資料は、学習者の意思や価値観を引き出す助けになるものであるべきあって、それらの教材等は、学習者の考えや価値観を含むべきではないとされている。

日本語教育での「学習者主体」において、日本語話者としての学習者の主体性を問題にしていけるのであれば、日本語教育で「普遍的」に扱われるべき「内容」、つまり、教室で常に焦点化されるべきものとは、学習者自身の意思や価値観になるはずである。なぜならば、日本語話者としての学習者主体性を問題にするということは、前掲の梶の「言語は創造的、主体的なものである」という指摘に立ちかえるということであり、学習者が自身の考えを日本語と結びつける、つまり、日本語化するという行為そのものに着目することだからである。教室で教師が用意する素材、いわゆる教材は、学習者の意思や価値観を引き出す役割のみを果たすべきものであり、それ自体の中には学習者の考え、意思、価値観は存在しないことを考えても、教室で普遍的に扱われるべき内容にはなりえないだろう（牛窪、2004:27）。

このような、どこまでも学習者を主体とする日本語の学びの姿を追求してみようと思っている。

C. 研究方法

私がニュージーランドのウェリントンにある中等教育機関のクイーン・マーガレット・カレッジに日本語アシスタントとして滞在した2013年4月から2013年12月の経験と、その前後に大学で行った外国人留学生を対象とした日本語教育のアシスタントの経験をフィールドワークととらえる。また、日本語教育についての発表の機会もいただいたので、それらを参考にし、文献やインターネットによる研究も行う。

II. クイーン・マーガレット・カレッジ

A. 学校概要

ニュージーランドのウェリントンにある、pre-school（幼稚園）から secondary school（高校）までの生徒が通う私立の女子校である。全校生徒は約680名で、14学年からなる。IB（インターナショナル・バカロレア）を導入している。そのため、言語の科目には特に力を入れており、言語の授業外での活動も活発に行われている。チリ、フランス、日本に姉妹校があり、短期・長期留学を多数受け入れている。2013年5月には、言語専用の校舎が建設された。Year9（満14歳）以上の生徒全員がノートパソコンを授業に持参することが必須である。学校内であれば、自由にWIFIが使えるため、パソコンを使って授業を行うクラスが多い。

B. タイムテーブル

授業時間は1コマ50分、2コマ目と3コマ目の間にモーニングティー・タイムがあり、4コマ目

のあとにホームルームと昼休みがある。1日にある授業は全6コマで、図書室で自習する時間が senior の生徒になると増える。月曜日のホームルームは全校集会、金曜日のホームルームは全校集会で神父が来てお祈りするという、キリスト教の学校ならではの習慣もあった。始業時間は8時30分、終業時間は3時30分。登下校は両親が送り迎えをして通う生徒が junior までの生徒には多い。

C. 学校行事

日本の小学校・中学校・高等学校に比べて、生徒主体の行事が多く、毎週のように行われている。例えば、生徒たちが作ったカップケーキやポップコーン、ホットドッグを学校内の庭で売って、その収益金をめぐまれない子どもたちのために、全額寄付されるお祭りや、校内の才能ある人を見つけ出そうという企画で、歌や楽器の演奏、演技を決められた時間で披露するステージが行われていた。キャンプや校外学習も多く、そのため授業に行ってみたら、誰ひとり生徒がいないという日もあった。

日本の学校で体育祭や文化祭にあたる行事以外にも、ミュージカルや合唱祭、キリスト教ならではの、クリスマスキャロルや近くの教会で行われるミサに参加する行事もあった。私が観劇した、ミュージカルは、台本、衣装、演出など全てを生徒オリジナルで工夫されてアレンジを加えて作られているものだった。「ヘアスプレー」「オズの魔法使い」「ピーターパン」など誰もが知っているようなお話を自分たちでオリジナルの台本を書き、振付をするなど各々の思いがこもった作品だった。そこでは普段の授業では見ることのできない生徒たちの素顔が見ることができた。

III. 日本語教育

A. 教育制度

1. 学校のシステム

a. 必修科目

私が日本語ティーチング・アシスタントとして、教えていた学校はニュージーランドの教育カリキュラムと世界共通のインターナショナル・バカロレアの2つのコースがあり、Year12（満17歳）の学年の始めに、どちらかのコースを選択できる。

ニュージーランドの Year1（満6歳）～Year10（満15歳）の生徒たちが学ぶ、学校における必修科目は国語（英語）、数学、美術、理科、保健・体育、技術・家庭科、社会の7科目である。

Year11（満16歳）は国語（英語）、数学、理科が必修科目となり他の教科（3～4教科）は選択科目となる。Year12（満17歳）は、国語（英語）が必修科目となり、他の教科（4教科）は選択科目となる。Year13（満18歳）では、必修科目は存在しない。日本の小学校は国語、社会、算数、理科、音楽、図画工作、体育、家庭科、生活、外国語の10教科である。中学校になると、国語、社会、数学、理科、音楽、美術、保健・体育、技術・家庭科、外国語の9科目が必修科目となっている。日本の高等学校（普通科3年）においては、国語、地理・歴史、公民、数学、理科、芸術（音楽・美術・習字・工芸）、体育、保健、家庭科、情報、外国語の計11教科が必修科目である。

b. 大学受験

i. ニュージーランドの大学受験にかわるもの

ニュージーランドでは、Year11～Year13 で全国共通学力試験 NCEA (National Certificate of Education Achievement) のレベル1から3を受験する。このNCEAの成績は学歴となると同時に、大学への出願時に提出するものになる。Year9～Year11 の間にどれだけの基礎学力が身についたかをはかるテストがNCEAのレベル1 (Year11) である。さらに、Year12、13 で受けるNCEAのテストレベル2、3では、将来専攻するであろう学科の必修基礎科目となるため、将来、自分が選択する科目を受験しなければならない。つまり日本の高校生にあたる年齢の時期には将来を考えて勉強に取り組んでいる。

ii. 日本の大学受験

一方、日本の高校の授業は大学入試（センター試験）に向けての科目を中心に勉強する。センター試験には国語、数学、外国語、理科（生物・物理・化学）、社会（世界史・日本史・地理・現代社会）の筆記（マークシート）の問題がほとんどであるため、ディベートやディスカッションなどの授業はほとんど行われない。

iii. 受験システムがもたらす授業の相違

ニュージーランドの中等教育機関で一番日本と大きく違うことは、ディベートやディスカッションが行われる授業の多さである。発言することは授業が行われる上で前提となっているため、教師と生徒の発言量にほとんど差がない。語学の授業でディベートやディスカッションが積極的に取り入れられているが、学校内でディベート大会があったり、優秀なチームは学外やオーストラリアに行って、ディベートの大会に出場したりする。

c. 個人を大切にす授業システム

ニュージーランドの子どもたちは独創的なアイデアを出すことが、どの授業でも求められている。その結果、創造性が豊かなのではないかと感じた。日本語の授業で、1日の過ごし方の動詞（起きます、着ます、食べます、行きます、寝ます、つくります、など）を学習した際に、パワーポイントをつかって、誰かの1日の過ごし方をつくることを宿題にした。使用するスライドは4枚以上で、主人公や時間の設定は自由という課題だったが、自分が持っているぬいぐるみがベッドで寝ているところや、コーンフレークをフォークを使って食べる写真を撮って、ストーリーをつくらせてきた生徒や、日本のアニメのキャラクターを主人公にして、実際のいろいろなアニメの場面を使いながら、まるで放送された話のように、1日のストーリーにしてきた生徒などがいた。世界旅行の絵本をつくる際には、世界地図を印刷し、マッピングの作業やブレインストーミングから絵本を作ろうという生徒が多かった。美術や音楽や演劇は最高学年（Year13）までの必須科目ではないが、ほとんどの生徒がいずれかを受講し、芸術に興味がないという子はスポーツクラブなどに所属している。授業があっても音楽の個人レッスンやスポーツクラブの大会で授業を抜ける子も多い。

しかし、何よりも個人の興味のあることを最優先して、教育を受けることができるシステムというのは素晴らしいと感じた。各々がその場所で常に創造性や独創性を膨らませるような授業を受けられる学習システムは個人を大切に、生徒の才能を伸ばすことにもつながってくる。

日本の中学校、高校と比較すると、部活動が挙げられる。放課後や休日、朝に練習し、地区、全国大会やコンクール、展覧会などの行事を目標に活動する。日本の部活動では、顧問の先生が指導に力を入れて、生徒と一緒に部活に取り組んだり、熱心に活動したりする。活動の程度は部活動や学校によってもさまざまであるが、部活動を通して礼儀や思いやり、規則などを学び自分の知っている世界を広げていくことは、共通しているのではないかなと思う。

日本の学校で取り入れられている縦割り班活動による清掃や遠足、登下校は年上の子が年下の子の面倒をみることで責任を感じて役割を全うしようとする学年を超えた制度だと思う。学芸会や運動会、文化祭などはクラスや学年という1つの大きなグループ意識、団体行動の意識を持ち仲間と協力するなどの社会性を学び、体験できる大切な機会である。

2. 子どもに合わせる

a. 異学年のグループ活動

日本のように自分よりも年上、目上の人たちに対する態度を学校の中において自分たちで学んでいく制度が私の教えていた学校にあった。「ハウス制度」と呼ばれるものがあり、分かりやすく言えばハリーポッターに出てくる組分けのように5つの縦割りグループがあって、幼稚園から高校生ままで全員がクラスや学年を超えて運動や芸術に取り組む。先生は介入せず、年上の子が年下の子たちの面倒を見て、協力し合って、行事を成功させるというシステムである。この行事に対する活動の熱心な生徒やリーダーシップをとってまとめる生徒、など活動に積極的な生徒を見つけた先生はポイントを与え、そのポイントが成績に直接反映するようになっていた。

b. 毎日の積み重ねが成績の積み重ね

ポイント制度はクレジットと呼ばれるが、テストの成績や授業中の態度などが全てポイント制度となっており、その生徒が自分なりに頑張ったと思えば教師がクレジットを与えることができる。

普段の授業での発言が苦手な生徒でも、出された宿題を昼休みに持ってきて、教えてほしいという生徒には、私からもクレジットを与えた。このように、小さな努力を積み重ねることを数回で出る成績よりも意味があると感じた。

オンライン上で単語を勉強する language perfect のゲームを作った時も、音、読み、その場で意味が分かるという3つのことが同時に学べるものであるが、テクノロジーが発達した現在では、中等教育機関に通う生徒たちが何を媒体に勉強に取り組むのかを考える必要があると感じた。教科書、ノート、ワークなど規定されてあるものだけを使って学習するだけでは、個人に合った勉強方法が提案できないケースが多い。書いて覚えるのが得意な子がいれば、オンライン上のゲームの感覚で学ぶことが好きな子もいて、1枚1枚暗記カードを作って持ち歩きながら勉強することが好きな子もいる。あくまで、宿題は単語を覚えてくることとし、方法は生徒に任せるといった手法は言語を学ぶ上でも必要だと感じた。

3. システムに対応する教材不足

学年が上がるにつれて、日本語の教材が充分でないことを痛感させられた。IBのテストでは時事問題が頻繁に出題されるのだが、範囲が広く、日本の環境問題から芸能、スポーツ、レジャーと難易度が高い。出題された問題にはその分野の専門的な単語や知識を知っていなければ解けないものもある。そのため、1つでも多くの教材の回数をこなしていくことを生徒は必要としていたが、実際にその学年のレベルに合わせた語彙で書かれている時事問題というのは見つけることが非常に難しかった。小学生新聞でも、漢字は読めても言い回しが難しく、オンラインのニュースでは語彙や文法は日本語学習者のために作られているが、実際に教材として扱うには、文章の中身が薄く、文字数も少ない。1つの教材を探すのに、かなりの時間を費やした。日本語能力試験の過去問題とは違って、インターナショナル・バカロレアの試験は文法が同じものでも教材の内容が大きく異なるので、世界中のホットな話題を日本語のレベルに合わせて作られている教材が望ましい。さらに、オンラインで検索可能であれば、テキストにする必要もなく、各々先生が使いたい時に使えるのが便利である。これについては後に述べる。

4. インターナショナル・バカロレア (IB) のシラバス

以下は、2013年2月から2013年12月にクイーン・マーガレット・カレッジで使用されていたIBの languageB のシラバスである。

a. External assessment

i. Communication and media

advertising / bias in media / censorship / internet / mail / press / radio and television / sensational in media / telephone

ii. Global issues

drugs / energy reserves / food and water / global warming, climate change, natural disasters / globalization / international economy / migration (rural-urban, or international) / poverty and famine / racism, prejudice, discrimination / the effect of man on nature / the environment and sustainability

iii. Social relationships

celebration, social and religious events / educational system / language and cultural identity, or self-identity / linguistic dominance / minorities / multilingualism / nationalism, patriotism, fanaticism / relationships (friendship, work, family) / social and/or political structures / taboos versus what is socially acceptable

b. Internal assessment

i. Cultural diversity

beliefs, values and norms / culinary heritage / how culture is learned / interlinguistic influence / language diversity / migration / population diversity / subcultures / the concepts of human beauty / verbal and non-verbal communication

ii. Customs and traditions

celebrations, social and religious events / dress codes, uniforms / etiquette and protocols / fashion / food / historical costumes / the arts

iii. Health

concepts of beauty and health / diet and nutrition / drug abuse / epidemics / health services / hygiene / illness, symptoms of good / ill health / mental health / physical exercise / surgery / traditional and alternative medicine

iv. Leisure

entertainment / exhibitions and shows / games / hobbies / recreation / social interaction through leisure / sports / travelling

v. Science and technology

entertainment / ethics and science / ethics and technology / impact of information technology on society / natural sciences / renewable energy / scientific research / social sciences

B. 授業内容

1. 漢字

a. 漢字を教える難しさ

日本語を学習するにあたり、まったくの初学習者からある程度のレベルまでは、すでにある文法書やフラッシュカード（* I）でも充分である。しかし、漢字を覚えるとなると漢字圏に住み、小さいころから見慣れている私たちとは違い、線が何本か、はねるか止めるかなどを集中して細かい部分を気にしなければならない。生徒たちは形を覚えるために、何回も書くよりも絵や図形などを思い描いて覚える。そうすることによって、記憶に残りやすく、同時に意味もあわせて覚えることができるようである。

b. 教える方法

漢字の意味と書き順を教壇で先生が教え、一度、生徒が自分でノートに写し、その後にワークブックにある漢字をなぞり書きして、覚えていく。日本人の文化と違い、お手本通りなぞるという考えがあまりないためか、形が大きく変わってしまい、辺とつくりの部分が離れるなどという問題はその都度、細かく呼びかけていかなければならなかった。

そこで、漢字の成り立ちをムービーや簡単なアプリにして、生徒の家庭学習の補助教材にすることを提案する。現代の IT 技術を使って、子供にもより身近に学習してもらえるようにする。何度もなぞって消すことができ、同時に漢字の読み方や意味成り立ちも一緒に学習できるため、読み書きを同時に復習するときにも使うことができると考える。

2. 日本の伝統文化

a. 資料や本がそろっている

日本の伝統文化や伝統芸能に関する資料や本は日本大使館を中心に多くそろっている。写真集や DVD などを見せて生徒に日本の文化を紹介したり、習字道具を使って実際に生徒に字を書かせたりできる。他にも、学校の図書館にも英語の訳が付いた資料が置かれている。実際に学校の図書館にある資料の一部を見て、「芸者」に興味を持った生徒が日本語の授業を受けるといった、日本の伝統文化に興味がある生徒に日本語を勉強するための動機づけにもなっていた。

b. イベント・展示会での日本文化の紹介

日本大使館で毎月、日本の映画が無料で見られるイベントや、博多人形や水墨画などの展示が定期的に行われおり、日本語学習者に、言葉以外の日本の面を知ってもらい、日本語学習者以外の人たちに日本のことをいろいろな面から知ってもらおうと試みているイベントであった。

実際に私が手伝った展示会では、博多人形が多く飾られていたが、日本が行事ごとに飾るお雛様、兜から、トラの置物や日本人形のような小さなものまで飾られていた。人形などを飾ってお祝いするという日本独特の文化と、人形に込められた願いや希望があるということが、ニュージーランドの展示会では日本の不思議な一面として捉えられていた。展示していた人形は全て日本大使館のスタッフを中心に日本人のみで片づけられた。私も、その作業に参加したが、一つひとつの人形をケースから出し、筆をつかって埃を落とし、ティッシュペーパーで包んだ後に、専用の包装をして段ボールに収納していくという過程から、日本人が一年に一度しか出さない人形を大切に扱うということが自然と身につくのだらうと感じた。

茶道や華道を実際に教わることができる教室も開催されており、伝統文化を体験してもらうことで日本文化を知ってもらおうという取り組みも行われていた。日本語の授業でも紹介し、生徒に学外でも日本語に触れてもらう時間をつくった。

c. 日本の雑貨屋

日本の雑貨も生徒が日本語に興味をもつ一つのきっかけであった。授業中の生徒の会話によく出てきた「Japan city」は日本の100円ショップで売っている商品を中心に、雑貨やお菓子を揃えているお店で、特に生徒から人気があったのは文房具やお弁当箱だった。日本語の授業に持ってきて、使い方を聞いてきた生徒や、長期休暇に日本の雑貨屋に家族で訪れる予定があるとやってきた生徒などがいた。

d. 全部日本の食品だと思っていた

海外で日本食が人気という言葉を目にするが、ニュージーランドでは都市部を中心にスーパーマーケットやチェーン店でよく見かけたのがSUSHIだった。巻き寿司が主流で、ときどきいなりずしも見かけた。寿司のネタはアボカド、サーモン、豆腐、卵、きゅうり、人参、牛肉などだった。メカブやみそしるも人気商品だったが、みそ汁は、紙コップのコーヒーをテイクアウトする感覚で、売られていた。スーパーマーケットではインターナショナルフードのコーナーがどこのスーパーでも大きく展開されていたが、日本食はうどん、そば、インスタントのみそ汁、わさび、醤油、のりなどがたくさん陳列されており、学生には飲みもの（コーヒー牛乳、ミルクティー、ラムネ）が人気だった。

ニュージーランドは、アジア圏から移り住んでいる人や、留学生などが多いためアジア料理の店が多かったが、タイ料理のお店でyakisobaと書かれていたメニューを注文すると、日本の皿うどんが出てきた。味付けが日本で売られているものよりも少し濃い感じがしたが、日本で食べる皿うどんと変わらなかった。

ポップなデザインの日本語で書かれた「お菓子屋」というお店に行ったとき、店内のほとんどの商品が韓国、中国、台湾の商品だった。持ち帰りできる、タピオカを使った飲み物が若い人たちに人気だった。ニュージーランド人やヨーロッパから来ている人たちには日本の商品や食品がとても人気があるため、漢字を使った国の表記のものは日本の商品だと思って買っている人が多かった。生徒も日本語を学習するまでは、日本語がひらがな、カタカナ、漢字が混ざって表記されていることを知らなかったから、漢字が使ってあれば全部日本の商品だと思って購入していたと話していた。

3. 日本のレジャー

a. 祝日の過ごし方

日本人の祝日として、ゴールデンウィークやお盆休みを紹介した。日本は祝日が多いが、個人で仕事や学校を長く休んで出かけるということは珍しいということや、祝日には家族で遊園地や買い物に行く例を話した。家族旅行は行くことがあっても、ニュージーランドのように1ヶ月間仕事や

学校を休んで、出かけることはほとんどないという紹介をすると、日本は何のためにお休みがあるのだらうと考えだす生徒もいた。また、長期休暇には学校から普段の宿題とは違う、特別な宿題がたくさん出されることを話すと、休みなのに宿題をして過ごさなければならないのはおかしいと、驚く生徒が多かった。

このことから私は、ニュージーランドでは、働く・勉強する時間と遊ぶ・休息する時間を分けることが習慣でメリハリのある生活をしていると思った。

b. 交通機関

「帰省ラッシュ」という言葉があるように、日本は長期休みの時に一度に多くの人が出かけることがあるため、新幹線や飛行機、そして高速道路が混むということを写真や映像を見せて紹介した。人口も日本とニュージーランドを比べると日本はニュージーランドの約30倍というデータをその前に教えていたこともあり、生徒はストレスがたまって日常生活だけでも大変そうというイメージだったが、さらに帰省ラッシュの映像を見て、宿題もあって、こんな混雑している休みなら、ほしくないと言っていた。

日本の電車もニュージーランドの生徒から見ると、特別なものだと話していた。駅の自動改札のシステムや、電車が時間通りに到着することは、ニュージーランドでは珍しい。しかしオークランドで自動改札のシステムが導入されていた。ニュージーランドの電車の車両が満席で次の電車を待たなければならないという、状況はなかった。なぜなら、切符を購入するのは電車内で車掌さんが回ってきたときに購入する、または定期を見せるという習慣があるからである。そのため、少なくとも、車掌さんは駅ごとに乗ってきた人に、運賃を払ってもらう必要がある。誰が乗ってきたかということが把握できるほどの人数で、通路を通れるということがニュージーランドの電車では当たり前前ようだ。ホームステイ先の人たちの話では、オークランドでは通勤や通学で混みあう時間帯にお客全員から運賃を払ってもらうのが難しいということになり、自動改札のシステムが導入されたそうだ。

しかし、電車が突然、運行を中止することはニュージーランドのどこに行っても、毎日のようにあることで、日本では事故や特別な状況でない限りは、珍しいということを伝えると、日本の電車のシステムはニュージーランドと正反対だ、とある生徒が驚きながら話していた。

その他にも、電車や新幹線がホームに着くときに待っている人が分かるように音楽が流れることや、ホームで待っているときには、1列や2列で並んで待っていること、ラッシュ時には駅員さんが電車に乗る人を外から押している映像などを見て、「日本の交通機関は常にあわたたく、リラックスできない」と、不安そうに話す生徒もいたが、「自分は日本の駅員になって、電車にみんなが乗れるようにすごい力で外から押したい」と話していた生徒もいた。

また、日本の電車で寝ている人が多いという話で「すごく変」とみんなが口々に叫んでいた。電車で寝てしまうほど、仕事や学校が大変なのか、もしそうなら、家に帰って趣味や好きなことに使う時間は寝ることになるの、すごくもったいない、など何人かの生徒から質問された。公共の交通機関で寝ることは、ニュージーランドではあまりないことだ。

4. テクノロジー

a. 日常生活のテクノロジー

自動販売機や自動改札など、私たちの日常生活は便利なもので潤っている。携帯やゲーム機器などは、種類も豊富で次から次へと新しい機種が発売されるたびに、世間から注目を集めている。一方で、ソーシャル・ネットワーク・システムがさまざまな若い人たちの問題のきっかけとなっているケースも近年では増えてきたと考える。これらのテクノロジーの使い道は、世代を超えて娯楽を中心に発展してきているように見える。

しかし、テクノロジーが日常生活の一部となっていることが原因でおきる問題があるということをもディスカッションや作文のトピックとして扱った。スマートフォンを操作しながら、駅のホームを歩いたり、車を運転したりすることや音楽を聞きながら、自転車に乗ることなどが原因で事故が起きてしまうことが発生している。こういった状況はニュージーランドでも日本でも同じであった。

また、携帯電話やパソコンを使うことで、日本では漢字が書けなくなっている人が多いなど、生徒がより身近に感じられるトピックを扱うことで生徒自身がテクノロジーの問題に関連したことを調べて発表し、お互いの意見を交換し合うことなどを意欲的に進んで学ぶようになった。

ニュージーランドに住んでいる人たちが多国籍であることから、生徒たちにグローバルな視点から考えて欲しいということを言わなくても、いろいろな国の問題を当たり前のように知っていた。作文や感想文などの宿題を出すと生徒はみんな、自分の意見と自分以外の人の意見を必ず書いてきていた。文にすることが苦手な生徒は、「私はそう思いましたが、多分他の人はそうは思わないでしょう。」というようなニュアンスの文を書いていた。

b. 学習のテクノロジー

ニュージーランドでは、ほとんどの人がパソコンを所有しており、学校内だけでなく町中でも、WIFIを自由に使える場所がたくさんある。このような環境から、学校教育にもパソコンを導入することが容易であると考えられる。生徒が意見を交換したり、発表したりするときに、黒板や前に出てきて書くことをしなくてもすぐに全員で共有できるという点や、保護者宛に配布するお知らせのプリントなども、メール送信することによって、印刷等の手間も省けることから、ニュージーランドでは、生活の一部となっていることが分かる。

日本では、仕事の際にパソコンやタブレット端末等を使っている人は多いが、学習の際にも、使用する人たちはこれから増えていくと、予測される。塾やある地区の生徒はタブレット端末を使った学習を行っている。しかし、日本の伝統文化である習字や字を書くという習慣を大切にしているからこそ、ノートに書くという学習方法を好む人たちも多いのではないかと考える。

C. 教材

1. インターナショナルバカロレア (IB) のための教材

a. インターネットからの教材の問題点

IBのテストで使われるものに似た内容の時事問題を探す時に使っていたサイトが gooo キッズや yahoo キッズである。しかし、あくまでオンライン学習が目的であるため、文章形式にはなっていないものが多く、問題としては使いにくい。そこで、オンライン上ではゲームとして楽しめる、かつPDFのような文章ドキュメントでまとめることを提案する。環境問題を授業で取り扱ったとき、世界の国や都市の代表的な取り組みを調べたが、個人でできる取り組み例は多くあっても、実際に取り組んだデータや改善された結果と一緒に掲載されていないため、問題になりにくかったりした。提案する例や活動ばかりで、結果が明らかにされない活動が多いため、読み物としてしか使えず、さらに次の活動に繋げることが難しかった。

b. 新聞や雑誌をリソースにする

身近な出来事をタイムリーに発信している資料として、新聞や雑誌を活用していきたいと感じた。グラフや写真、図などが掲載されており、言葉の細かい説明がなくても、学習者に想像させることができ、印象にも残りやすいものだと考えた。しかし、使用する場合、文化や習慣、常識など全てが日本に住んでいる人に向けて発信されているものであることが前提として作られていることもあり、学習者には著者や記事の意図が分かりにくいのだと感じた。日本語学習者へ発信されている雑誌等にも読者が限定される傾向にある。

2. 学習者のニーズに合った教材の開発

中等教育機関では、教師が教室で教え、異文化に触れさせる機会を積極的につくり、生徒同士が協力し合って課題を乗り越えていくことが大切な場だと感じる。日本語教育の教材や資料として使われているものの多くが教育機関を対象にした初級や中級レベルのものが多い。その中でも教科書や文法、語彙集などはたくさんあって、日本語を全く学んだことのない学習者やその少し上へのスキルアップを中心にした教材は増え続けている。

しかし、教材が学習目的別になっていない。学習者は学校教育で学ぶ人だけではない。ビジネス

で日本語を習得しなければならない人やプレゼンテーションのための日本語を身につけたい人、短期の観光として日本に来る人など、学習目的は様々である。私がティーチング・アシスタントをしていた時の教材例でいえば、社会問題を対象にした読解やディスカッション、スピーチなどの授業が中心となるシラバスだったが、社会問題を易しい日本語でとなると、教材の内容がタイムリーではなく、事柄や事実だけが書かれているものなどが中心で、問題提起や今後の課題といった何を伝えようとしているのかということが書かれているものが少ない。教材として近いものは小学生新聞なのだが、日本語を母国語としない人たちへの教材として扱うには難しい。これらの教材は、学習者の日本語レベルを考えた教材になっていなかったので使えなかった。

3. オンラインを使った人材・教材の開発

インターネットのSNSが普及し、コミュニケーションツールとしてさまざまな方法で学習するという方法が増えてきている。Facebookを使って、文字と絵や写真、動画をアップロードして伝えることができたり、スカイプで会話の練習ができたりと、日本語を教える場が増えてきている。

私が実際に提示して反応が良かったものは、漢字のアプリを生徒に使ってもらったことだ。指で実際に画面に書いて、その漢字を検索でき、読み方や熟語がのっており、さらにその漢字の書き順をなぞって覚えることができるものである。タッチスクリーンの機能があるからこそ、使いやすいアプリだと感じた。私たちも、漢字を書いて覚えるという学習方法が減っている。検索や変換機能があるパソコンや携帯などに頼りがちである。日本語学習者はひらがなが曲線の部分が多く、カタカナは直線の部分が多い、そして漢字は曲線も直線も混じっていると、書いて、読めるというレベルになるまで非漢字圏の学習者は時間がかかってしまう。回数を重ねて自分が見たことが何度もあるという経験をさせなければ、似ている字と混乱したまま覚えてしまったり、初めて見た字のように感じてしまったりする。

しかし、オンラインでの学習提供はその後のサポート学習としても利用価値があると考え、学校教育以外で日本語を学ぶ人たちへの支援にもなるのではないかと考える。オンラインチューターのように自宅で学習することを基盤としている人たちへのサポートもできるのではないか。

ニュージーランドには、ホームスクールという学習の方法があり、都心から離れた場所や学校で学習する子どももいる。

D. 授業形態

1. 会話クラス

会話クラスは一般的な知識を伝えた後で、生徒が質問したり、プレゼンテーションで日本との違いを比べたり、更に深い知識を身につけるために、ディスカッションやディベートなどを通して、聞いたり話したりの力をつけていくものだが、日常的な語彙を増やす場所でもある。例えば、お店のメニューを見せて、日本に行った時のような状況を作り、生徒をリラックスさせて日本語を話すことをなるべく自然にできるよう、しむける。常に、会話テストを意識した授業をしてきたが、テスト本番の日には絵を見てその感想を言うというセクションで、不自然な日本語になり、日本語の文を考える間、何も話さない時間ができてしまっていた。クラスの雰囲気にもよるかもしれないが、生きた教材でもある、年の近いアシスタントがいることによって、教室外で日常会話を積極的にすることや、何を聞かれても、答えが間違っている、否定せず、そこからどうしてそう考えたかを質問していったらあげべきだと感じた。時には、日本語の文法ミスで、本人の意図した会話の意味と大きく違う内容が伝わっているのだらうと、思った経験が何度もあった。

2. 個別指導

ヨーロッパ言語のクラスではアシスタントと個室で、1対1で授業の中の15分ほどを使って話す時間が設けられており、日常会話のやりとりや写真描写、スピーチの練習などさまざまなシチュエーションに合わせて話す練習を行っていた。日本語の授業では受講生徒数が少ないため、クラスのレベルに合わせた会話練習などは行われていなかった。授業中よく話す生徒はスピーキングの力と自信をつけ、より話せるようになっていくが、あまり授業中に発言をしない生徒には、なるべく、

問題を当ててみんなの前で日本語を話すことへの抵抗をなくしてもらおうと試みた。しかし、その場合もクラスで発表するのが苦手だと、余計に苦手意識が高まってしまう生徒もあり、学習の会話に限定する場合は、個人的なサポートや短い時間の個別指導によってだんだんと身についてくるようになったと感じた。

3. 絵本やDVDをつかった授業

文字、絵、ストーリーがある絵本は、状況理解がしやすく、自分が読み聞かせることができた。生徒が好きな本を選んで読んだりするのに、いい教材だと考える。日本昔話だと、日本人の生活が垣間見え、文化や習慣を学ぶことができる。日本の幼稚園に通う子どもたちが見ているような絵本はストーリーがシンプルでところどころにキャッチーなフレーズが入っていたりする。また、DVDを使った授業でスタジオ・ジブリの「となりのトトロ」や「千と千尋の神隠し」を初級の学年の生徒に見せたが、反応もよく、音楽やよく使われる台詞を覚えて、口に出していた。

歌やジャズチャー、アクションを使って単語を覚えさせると、生徒もたのしく、記憶にも残りやすい。こういった授業は常に生徒が参加型として進めていけることも、大きな意味がある。先生が覚えやすいアクションを提示しても、生徒たちが「こっちのほうが、覚えやすい。」と、次々にアイデアを出してくる。日本語が得意でない生徒でもアクションや音楽が好きな生徒は積極的にみんなの前に出て、自分の覚え方を他の生徒に見てもらおうとする。アクションや歌を関連付けて覚えさせることは、言語という必須科目だから、日本語を選んだという生徒が思わぬ才能を発揮できる場にもなっていた。

4. 長期休暇中のワークショップ

長期休暇中に日本語の宿題のサポートや次の学期にあるテストの準備のための登校日が各学年の各教科で設けられていた。先生の提案と生徒の意思でワークショップの内容が決定された。ワークショップに参加するかどうかは生徒の自由だが、ほとんどの生徒が積極的に参加していた。

主に、スピーチやライティングテストのための予習やそれらのテストに向けての練習を集中的に行った。スピーチの下書きを持ってきた生徒には、どれぐらい既習の文法を使って文が作れているか、時制や形容詞などの使い方を理解して作ってきているかなど、その時点での学習レベルも同時に知ることができた。

E. 授業以外の課題

1. 課題と学習意欲の引き上げ

通常の宿題はワークブックや単語を覚えることが多いのだが、ユニットごとにパワーポイントをつくらせる宿題を与えると、思い思いのパワーポイントの作品ができあがってくる。1日の流れを起きてから、寝るまでをつくったときは、主人公を自分の飼っている馬やぬいぐるみにして、写真を撮ってつくっていた。アニメの画像を使った生徒は、日本の朝食文化を自分で調べて、両親はご飯とお味噌汁を食べ、子どもたちはパンとオレンジジュースにするなど、個人で工夫があり、バラエティに富んだ作品になった。このように、ただ習った文法を復習するだけでなく、自分たちがオリジナルの作品をつくり、みんなの前でパワーポイントを使って発表するため、スピーチの練習にもなり、初級レベルの学習者の学習意欲の向上にもつながる。

ワークブックなどの細かい宿題は締め切りまでにきちんと提出するという習慣がないため、ステッカー・チャートを作り、クラスごとに一覧にし、自分できちんと締め切りまでに宿題を提出した生徒にはシールを貼らせて、シールが1列埋まったら、日本の文房具やハンカチなどをプレゼントするという方法を行っていた。その結果シールを自分のチャートに貯めるために、毎回宿題を授業が始まる前に見せにくる生徒や、自分一人で宿題を終わらせることが苦手な生徒は授業の終わりに、昼休みに宿題を手伝ってほしいと、日付を伝え、予約してくる生徒もいた。

2. スピーチ・コンテスト

ニュージーランドでは数か所に分かれて日本語スピーチ・コンテストが毎年、日本大使館の行事

の一環として行われている。学年ごとに分かれて生徒が日本に関する自分の意見をパワーポイントで示しながら、発表していた。生徒のスピーチのトピックは「漢字」「米」「休日」「さかなくん」など、生徒自身が日本語を学んでいて興味を示したものをスピーチにしていた。「米」をトピックにしたイラン人とイギリス人のダブルスのYear13の生徒は、「米はイランの文化の象徴であるが、イラン人はだんだんとお米を食べなくなって、同じことが日本にも言える」と話していた。「お米を食べなくなること、文化の中心がだんだんなくなってしまうかもしれない。」と、これから起こるであろう問題提起をし、日本とイランにおいて共通している食事文化の考えを述べ、Year13の部門で優勝した。

スピーチで自分の考えを外国語で話すことができるということは、その後の学習において成果がでると感じた。何かの文章を読んで、作文を書くときには、自分の意見を伝えるフレーズを習得しているため、どんな表現で伝えればいいのかということを吟味できる。そして、文章の組み立てを考えるときに、時系列の単語を使って述べていくことや、意見だけでなく、一般的な考え方や今問題になっている事例を文に含ませることで、より相手に伝わりやすい文になるということを理解して文章をつくっていくことができていた。

スピーチ・コンテストの練習から、話すことの才能のちがいを感じた。同じ文章のレベルでも、プレゼンテーションする能力やアイディア次第で人を引き付ける力に違いがでることに気づかされた。ニュージーランドの生徒を見ていると、ディベートが得意な生徒と、スピーチが得意な生徒は少し、違いがあった。スピーチが得意な生徒は、ユーモアな表現やみんなを驚かせることを好む生徒だった。クイーン・マーガレット・カレッジのYear13の生徒もYear12の生徒もそれぞれの学年で優勝したが、大使館賞を受賞したのはYear12の生徒だった。日本語の日常的な言い回しをスピーチの所々に、入れて審査委員である日本人の大使館のスタッフたちを笑わせていたり、擬音語や擬態語と表情を合わせたりして、感情を豊かに伝えようとしていた。

3. サブカルチャー、ポップカルチャーがもたらす学習動機、モチベーション維持

a. アニメを通じた日本の若者理解

アニメや漫画の新しい文化が日本語学習者の魅力を惹きつけるリソースになっている。日本では、あまり聞かないアニメのタイトルを生徒たちから教えてもらった。アニメの世界独特の表情表現やアニメの話で垣間見える日本の学生の生活などが生徒たちの興味を惹きつけるものになっていた。

ニュージーランドの生徒が思う、日本人のイメージは黒髪で制服がきらびやか、学校が終わっても学校以外の勉強する場所に行く。土曜日曜の休日は部活動に行き、制服はみんな同じアレンジをしようとする。それなのに、アニメの世界ではカラフルな髪の色、個性的な学校生活が存在していると言っていた。

b. 漫画の人気

ニュージーランドには、日本の漫画がたくさん売られている。アニメ同様、キャラクターの人気と、予想がつかないストーリー展開で多くの漫画ファンがいる。普通の高校生が変身して魔法が使えるようになるなど、学生や生徒と同世代が主人公になっている漫画も多数あるため、特に若い世代から人気が高い。

学校内や図書館などでも、日本の漫画が英語に訳されて置かれている。日本では、あまり出回っていない作品や、20年以上前に書かれたものなどの方が人気があった。日本の漫画のキャラクターのコスプレが人気で、インターネットからの購入という手段で、衣装を取り寄せて、学校行事などで、着てくる生徒もいた。

c. キャラ弁を作る生徒

お弁当をお母さんが作るという考えを持っているのは、ニュージーランドでは小学生ぐらいまでの年齢の子たちが多い。基本的にニュージーランドのお弁当は前日の夜ごはんの残りものの詰め合わせか、サンドウィッチ、スナック菓子などが主流である。ニュージーランドで料理をする、ご飯をつくるという習慣は晩ごはんの時のみで、朝は自分たちが好きなものを食べ、昼は自分たちで好

きなものを用意し持って行く、というのが習慣となっているからだ。私がよく見かけたのは朝、両親と子どもたちがカフェで一緒に朝ごはんを食べている風景だった。

日本は朝ごはん、昼のお弁当、夕食と3回とも料理をするのが、普通という家庭も多いだろう。特に、幼稚園や小学校にお弁当を持って行くという子どもに、お金を渡して買って行きなさいという光景に、私自身馴染みはない。日本のお母さんが子どもに作るお弁当に、キャラ弁というものがあると紹介したところ、「ニュージーランドなら、お店として成り立つかもしれないね」と、ある生徒が言っていた。海苔を切って顔のパーツを作るといった細かい作業や、色合いまでも考えてある工夫に、生徒たちは目がくぎづけた。そして、ついにキャラ弁に感動した生徒の一人が、別の生徒の誕生日プレゼントとして朝早く起きてキャラ弁を作ったという、報告を受けた。ニュージーランドの生徒のアイデアだなと、感心した。

d. ファミリーレストランとバイキングに憧れる

日本に多数ある、ファミリーレストランやバイキング形式の店を、家族連れや若い世代が休日に訪れる場所の1つとして、生徒たちに紹介した。安い価格で、長い時間食事を楽しむことができ、料理の種類が豊富にあるお店の形はニュージーランドではないため、生徒は興味をもっていた。フードコートのように、たくさんの店が並び、大勢で行っても、好きな料理を注文することができるお店や、お皿の大きさが値段が決まっていて、好きなものを選べるお店はあった。しかし、日本のバイキングのように何度でもおかわりが自由、ドリンク飲み放題などのシステムはなかったため、そういったシステムを「すごくお客さんのニーズを考えている」と言っていた。

e. コンビニエンスストアとスーパーマーケットの差

日本のコンビニエンスストアは、24時間365日の営業が通常となっている。公共料金の支払いやインターネットで注文した商品の受け取り、コピー機やATMも設備されている。食品、日用品もそろっている。さらに、食品は1週間ごとに新商品が出る、おでんやレジ横のホットミール、最近はコーヒーメーカーから淹れたてのコーヒーが飲めるなどのサービスがある。

ニュージーランドにあるコンビニエンスストアは、24という表記はあるものの、営業時間は朝10時から夕方6時ごろまで、または朝10時から夜10時ごろまでのものと、店舗によって時間は異なっていたが、実際の営業時間は24時間もなく、スーパーマーケットが小さくなったような作りだった。売られている商品は飲み物、スナック菓子、サンドウィッチ、ミートパイのような冷凍食品などや雑誌、新聞が置いてあった。商品の値段も、比較的高く、店舗数も少なかったため、日本と比べればコンビニはあまりにぎわっていない。

ニュージーランドでは、24時間ずっと営業しているというお店は、スーパーマーケットという認識が強いからか、日本でどうしてコンビニが人気があるのだろう、と不思議に思った生徒も多かったようだ。日本のコンビニは、利用する目的もさまざまである。本来の目的とは別に、行ってもついでにという形でついつい買ってしまふものがあったりするのではないだろうか。日本人の便利さをどんどん追求していったお店の形になりつつあるのではないと考えられる。

生徒に「なぜ、日本人にとって便利さが一番大切なのか」という質問をされたことがあった。今の過ごしやすさを考えすぎていて、「どうして、環境や将来の生活について考えることをどんどん後回しにしているの。」という質問を日本の暮らしを紹介したときにはいつも、たくさん聞かれた。目先の便利さや、今の暮らしをよくする方法がより便利になることと、私は考えてしまっていたが、長期的な目線で物事を考えるということ自体を、日本で、今までの学習でほとんどしてこなかったように思う。例えば自分のテストの点数を上げるための長期的な計画は考えることができても、環境をよくすることの長期的な計画は考えることをしてこなかったように感じた。これについては、討論で詳しく述べる。

f. 食品サンプルをもって帰りたい

ある生徒が、日本に短期交換留学で行ったとき一緒について行った生徒のお母さんが「食品サンプルはすごく丁寧に作られていて、分かりやすいから、注文のときに困らなかった」と言っていた。

メニューに英語表記があってもイメージが湧きにくい名前や日本語表記のみで読めなくても、見ただけで料理のイメージが分かるものなのだろう。そしてたいてい、店の外にガラスケースに囲われて展示しているものが食品サンプルであるため、食事をするときの店選びの決め手にもなる。実際に、私たち日本人は日常的に見かけるため、あまり意識したことがないかもしれないが、目から入ってくる情報はとても大切で、忠実に再現されていることは、海外の人たちは驚くのだろう。

F. 山口県立大学での留学生チューターとして

山口県立大学に来ていたフィンランドからの交換留学生に半年間、日本語チューターとして学習面と生活面でのサポートを行った。

1. 日本語能力試験への挑戦

交換留学生のAさんは、日本語のレベルをもっと上げて、日本の文化や生活を充実させたいという思いはあったが具体的な目標をもっていなかった。ところが、日本語能力検定を受けたいとAさんの方から言ってきた。そこで、最初に留学生の現状のレベルを把握するために、インターネットのサンプル問題を解いてもらった。挑戦したいレベルの問題は全く解けなかったが、一つレベルを下げると全問正解という結果が出た。せっかく試験に挑戦するなら、自分が目標としているレベルへの挑戦を奨めたところ、毎日新しい単語や文法項目を勉強し、チューターの時間を積極的に利用してくれるようになった。それ以前は、チューターの日時を決めるのは私の提案だったが、日本語能力試験を受けると決めてからは、毎日少しの時間を使って勉強の計画を立て、自分からチューターの時間割を聞いてくるようになった。

日本語能力試験の結果が判ったのは、帰国してからのことだったが、無事合格し、とても喜んだという内容のメッセージが私の所に届いた。

2. 授業のサポート

日本語の授業の宿題やテストを始めとする、チューターの主な活動内容は、受講している授業のサポートをすることだった。授業で習った文法項目を復習させたり、その授業で習った表現を用いて文章やプレゼンテーションを作成する時の添削をしたりしていた。

中でも、プリントの新出単語を使って、習った文法で文を作るという問題の指導が難しかった。留学生たちは単語の意味も分かり、文法も理解しているのだが、感じたことや思ったことなど、留学生の意志を尊重した文を作らなければ、宿題ですることがただの作業になってしまいがちになるからである。

そこで、週末や長期休暇の経験や体験の話題を盛り込むように留学生に促し、なるべく自分の思いが込められた文章になるようにした。会話の練習にもなるため、自分の言葉を使って文章を作らせ、文の内容を変えないように、いろいろな表現の文法を教えた。その結果、普段の会話で質問をされて、答え、更に自分からも質問を返すといった流れの会話ができるようになった。

また、授業のプレゼンテーションの時間やお礼の手紙を書くといったフォーマルな表現と友達の日常会話で使う表現をその場ですぐに判断して、使い分けができるようになった。一緒に行った旅行先では、お土産屋の店員から、商品の説明をしてもらって、自分が知りたい賞味期限や原料などが全部理解出来た結果、商品を選び直すなどしていた。

3. 文化体験

私がチューターを担当した留学生は旅行が大好きということもあり、様々な場所へ、いろいろな目的で訪問していた。観光をしながら、母国のフィンランドと似ている文化や習慣を知って、嬉しそうに報告してくれたり、まったく異なる日本の文化を楽しんで体験したりしていた。また、地域の人達と関わる授業やイベントに積極的に参加し、こうした文化体験を生活の一部として過ごしていた。

G. クラスの運営

私は日本語アシスタントとして、始めは進度の遅れている生徒に対して個人的なサポートをしていた。しかし、会話クラスを一人で任されるようになると、授業を運営することが今までと違い、同時に、クラス全員に向けたものを展開しなければならなかった。以下に、学習者のレベル差に対応した授業、アシスタントの立場からの指導方法、クラスで使用した教材について述べる。

1. 学習者のレベル差に対応した授業

1つの教室にレベル差が出てくる場合、どの学習者に合った授業を展開するのか、どのように対応すればよいのかという問いに、いくつか解決方法があることを横溝紳一郎 (2011 :85-87) は述べている。

一つのクラスにいろんなレベルの学習者がいると、どのレベルに合わせた授業をすればいいのかという問題が生じます。「上の学習者 (fast learners) に合わせれば、下の学習者 (slow learners) がついてこられないし、下に合わせれば、上が退屈するし…」ということで、「では、真ん中あたりに合わせようか」と考える教師も少なくありません。それでも、「退屈だ。そんなこと、分かっている」あるいは「分からない。進むのが早すぎる」と感じる学習者がクラス内に確実に存在することには変わりありません。

それぞれの学習者に教師ひとりで対応するのは難しい。田尻 (2009 :143-4) は、学習者は3つのタイプに分かれるとし、それぞれの対応方法を提示している。単に学習のスピードだけではなく、学習者の性格や心理を日頃から観察し、見極めることが大切なのである。

①次に進みたいタイプ。

②友だちを手伝い始めるタイプ。

③遊んでしまうタイプ

①のタイプは、ライバル意識型。また、勉強に対してプレッシャーを感じていて、少しでもいい成績を取りたいと思っている子。あるいは、やっていることが面白くて、もっともっとやりたいという純粋な願望を持っている生徒。こういう生徒に対して、「友だちを手伝って」と頼むと、難色を示す。そういう時は、早めに諦めて、先に進ませる。ただし、まだ無理なところは、説得してやめさせたほうが得策である。こういう生徒たちのためには、2番手、3番手、4番手の課題を用意しておく。すべてやり終えてしまったらこう言う。「嘘だろ。そんな。これだけの課題が1日で終わるなんて、予想していなかった。まいりました。まさか終わるやつが出るとはなあ…。今日はこれ以上用意していません。悪いけど、まだできていない人を手伝ってくれる？」と言うと、満足そうに「いいですよ」と言ってくれる。(中略)

②のタイプは、本当にありがたい存在である。自分が合格した喜びを友だちにも味わってほしいと思い、何も言わなくても友だちを助け始める。あるいは、小学校時代から、弱い子を守ってきた子たち。見ていてじーんとくる。ただし、中1は小学校の先生方の意向でそういうペアは同じクラスにしてあることが多く、責任とプレッシャーを感じて、無理して友だちを助けにいつている生徒もいるので、安心しないことだ。常に子どもの本心を探る。授業作りのネタを探してアンテナを張っている先生ほど、よい教材に巡り会うことが多いのと同じで、学習者心理も、常日頃から分かりたいと願っていなければ、目に映ったことが脳に届かない。

③はしばらく泳がせておき、「アリとキリギリス」の物語を体験させる。①のタイプが満足して友だちを教え始め、クラスが教え合いの熱気を帯びてきた頃に、③のタイプの肩をたたき、「おい、見てみ。他の子たちはどんどん進んでいるぞ」と言えば、「やべっ！」と言って勉強に戻っていく。そして教師は③の子と一緒に遊んでいた slow learners を「さあ、行くで〜」と引き連れて行き、鍛え始める。

2. アシスタントの立ち位置

ニュージーランドで日本語アシスタントをしていた時、学習者から見れば、教師という立ち位置にあった。しかし、メインではなく、補助で入っている先生だった。帰国して、大学生を対象に行う日本語国内実習に参加した。2人1組で行うティームティーチングである。海外実習はメインの先生がはっきりと分かるため、生徒が混乱することも、先生同士で、授業計画の流れについてお互いの役割を話し合うこともなかった。国内実習を計画する時も、既に海外実習のアシスタント経験がある人たちでグループを組んだ。そのため、片方が教壇に立って説明しているときは、片方は教室の後ろに回り、学習者と同じ方向から授業の進行をさまたげないよう、教えて回っていた。

しかし、初級の国内実習を見学に行ったところ、2人同時に教壇に立ち、補足説明のため、2人が同時に話したり、メインで授業をしている人の話を遮ったりといった場面が見られた。経験が少ないと、意識をしなければ、つい自分がその場で補足したり、授業の進行を中断させるような行動を無意識のうちにしたりしてしまう。この問題について田尻（2009：80-2）は以下のように指摘する。

ティームティーチングでは、役割上、メインの先生（T1）とサブの先生（T2）がいる。メインの先生は、自分が授業の責任者であるという思いからか、気づいたことがあると全体に向かって声がけをしてしまう。しかしサブの先生にしてみれば、自分が生徒に指導している最中に何の断りもなくそれを中断されたのでは、存在を無視されたのと同じことになる。ないがしろにされたと感じ、傷ついたり、メインの先生に反感を持ったりしても不思議ではない。（中略）ティームティーチングは、一種の組織活動である。組織で活動するには人間関係がなにより大切だ。相手を思いやり、コミュニケーションを取り合うことが不可欠である。一方が全体説明が必要だと感じたら、もう一方に一声かけて相談すべきである。

3. クラスでの教材

日本語ティーチング・アシスタントとして教材を使っていた際には、テーブルの上で対学習者に使える教材だった。そのため、クラスの授業を任せられたときに、クラス全員に対する教材という考えが抜けていた。ここでは教材の中でも、文字カード、絵カード、歌、映像、画像について述べる。

a. 文字カード

文字カードは初級クラスで、ひらがな、カタカナを1文字ずつ覚えさせるために使用した。教室でクラス全員に向けて文字カードを使用する際に、気をつけなければならない点の1つ目はカードをめくる方向である。後ろから前にめくることで、学習者は次に何が出てくるのだろう、という期待させることができる。2つ目はめくるテンポである。大きいカードだと持ち方ひとつでカードをめくるスピードが調節できる。実際にカードをめくるテンポがもたついていると、授業全体の雰囲気悪くしてしまった。3つ目は学習者全員が使用するカードが見えるかどうか、である。教室の大きさ、学習者の人数に合わせて使うカードの文字の大きさにおいても配慮が必要になる、ということを学んだ。

実際に教壇に立って感じたのは、めくるテンポで学習者の集中力が変わってくることだった。ゼロ初級の学習者が少し早いと思うぐらいのテンポを教師が作って、そのリズムに慣れさせることと、回数を重ねることによって、ひらがなを認識し、読むという行動のスピードが変わっていた。比較的大きなカードを使って教えていたため、持ち方を工夫しなければもたついてしまって、テンポがゆっくりになってしまった。学習者の集中力の持続を工夫ひとつでコントロールできるように思った。

文字カードを使うことで楽しく学習ができるという生徒が多数いた。そのため、手のひらサイズで少し小さめの文字カードを画用紙で作って、既習のひらがなを自宅学習できるようにした。ひらがなは絵と英語のフレーズで学習していたため、裏側にはひらがなを覚えるときのフレーズ（a for antenna のような）と書いて絵と文字、音と一緒に思いだせるような教材で学習してもらった。それを授業中、先生が発音したひらがなをカルタのように探したり、友達同士、ペアワークをすると

きお互いにフラッシュカード（*I）のように使ったりと、生徒が好きな方法で学習する教材の1つになっていた。

b. 絵カード

授業では、絵カードを使って動詞の「～マス」形を練習させることを実践練習を通して学んだ。学習者を混乱させないためにも、使用する絵はシンプルにすること、絵カードを見せる時に学習者全員に絵が見えるような場所に立つこと、絵カードの位置を固定させてめくることだった。

このときに、登場人物や時制などを口頭説明しなくても、すぐ学習者が理解する方法として、付箋を使うということも学んだ。視覚情報として付箋に書いて絵カードに情報を足すだけで、プラスアルファのエクササイズに発展することは驚きだった。

授業の人数やクラスの大きさ、机と椅子の配置もあり、絵カードを実習で使用したことがなかったので、実際に授業で練習することが少し難しかった。私が生徒に教えていたときは、パワーポイントを使って動詞の機械的練習をさせていた。パワーポイントは同じ絵を使うことは簡単で、写しているスクリーンの横に人物や時制、場所などを足して生徒に練習させた。

絵カードを使って反復練習させるときに、できるだけ一人ひとりに言わせることを心がけると、何度も同じ単語が音として全員が聞いているので、耳に残りやすい。それに加えて、動詞を初級の生徒に教えた時は、絵カードで一通り練習させた後、ジェスチャーやアクションを考えさせて、再度絵カードを使って単語を記憶させる練習すると、目で見て、声に出して、体で表現するという行動が一連になって覚えられるため、定着率も良かった。

c. 歌

曲の選択と学習者に歌わせるということについて、授業に取り入れるには慎重にならなければならない。国や文化的な背景はもちろん、学習者の年齢によってもかなり歌を選ぶポイントが変わってくるからである。

実際に、歌で教えていたものは、「～マス」形の動詞、天気、曜日、月などを *It's a small world* やロンドン橋、学習者の国歌の変え歌などを利用して、リズムよく覚えさせるために使っていた。これらの歌を授業で使った理由として、生徒たちが全員、メロディーを知っていることである。歌を使う目的は、初級クラスの生徒を対象に、単語を覚えることであったため、日本語をリズムよく覚えさせることを重視していた。クラスのレベルが上がると、日本語の童謡やポップスなども好んで歌う生徒が多くいた。学習者が中等教育機関の生徒だったこともあり、興味を引き出し、楽しんで覚えてもらうことを重視した。

歌を教えるのは、文法や単語を教えたあとで、覚え方の1つとして提示した。初級の前半のみで使用し、定着するのを目的とした。「良い」という単語の音の変化が覚えにくいという生徒の声があったため、スーパーで流れている「魚を食べると、頭がよくなる」「魚を食べると、体にいい」といったフレーズを使った学習方法を授業を担当していた先生が提案していた。しかし、単に「良くなる」「いい」の形を覚える際のみ、歌だけの教材として扱うのではなく、生徒から質問や学習方法の提案があってから、提示するという過程が大切だと考えさせられた。

私が教えていた学校では、日本語は外国語として4ヶ国語のうちの1つ選択できる選択授業だったため、年に数回は日本語のブレクラスを次年度受講する生徒のために開講した。生徒が実際に体験して教科を選択できるワークショップや、両親や家族も参加して一緒に授業を体験できる language day の開催にもなって「歌」を使うことが多かった。特に、「かえるの合唱」は輪唱するという点から好評だった。また、簡単な手遊びが歌の中にあると日本の歌を歌いながら一生懸命手遊びを練習していた。授業の中で歌を歌うことそのものよりも、興味を惹きつけるという観点から「歌」を教材として使った。

d. 映像

ただの鑑賞にならないように、事前にどんな映画でどんな学習項目で使うことができるか、どのタイミングで学習者にその映像を見せるかを吟味することが、大切である。映像を授業でながす時

間や内容だけでなく、一場面を切り取って授業で伝えたい内容が伝わるか、学習項目と一致するかをいろいろな資料を集めて、的確にかつ映像を見せた時に印象づけることが目的だと感じた。

生徒の興味のあるスタジオ・ジブリのアニメを使って音声なしで一度見せて、視覚的に日本の伝統文化を学ばせ、2回目は音声を入れて、短い会話を聞かせるという学習方法は中級程度のクラスに取り入れることができる。登場人物があまり多くない場面や、表情や感情が表されていることがわかるような場面を選んで使ったり、映画の予告編などの短い映像を利用したりして、聞き取りの練習をすることがより効果的であることも、授業や実際の現場で感じた。

e. 画像

絵や写真は学習者がすぐに状況を理解するために有効な教材で、なおかつ自己表現を強要しないという利点がある。また、写真やイラストの人物や動物の気持ちになって話ができるという使い方もできる。これをスピーキングの教材として利用する。

生徒の自己表現がうまくいかなかったり生徒に自己表現活動をされるのに気が進まなかったりするには、いくつかの理由が考えられる。(中略) まず一番大きな原因(ハードル)は、自己表現の「自己」をととても大げさに考えていることではないかと思う。(中略) われわれは毎日、いろいろ考えたり、さまざまな意見を述べたりする。しかし、それはいつも大きなことについてはではない。生きる悩みのことだったり、将来の夢であったりするものではない。また、世界平和や地球環境についての意見を述べることもそう頻繁ではないはずである。日頃、あまりやらないことをやらせようとするれば、難しいのは当たり前だろう。ましてや、その難しいことを(英語という)外国語でやらせようというのであるから、さらに難しくなる。

(中略) 自己表現を「自分自身をさらけ出すこと」と考えているとすれば、まず考えを捨てた方がよい。しかも、表現するトピックはいつも人生の大問題などを述べさせないといけないうような考え方もいっしょに捨てた方がよいだろう。その代わりに、もっと小さなことについて表現させるように心がければよいだろう。例えば、「昼にカレーを食べようと思うのだが、もしかしてうちの夕飯もカレーかもしれない。昼は避けておいた方がいいか」であるとか、「眠いのだが、宿題を終えてから眠った方がいいか、すぐに寝て朝早くおきて宿題をした方がいいか」などという「問題」である。こうした小問題から始めれば、そんなに表現活動をさせることに気が重くなることはないだろう(金谷、2002 :8-11)。

2つの写真を見て、その風景を描写し、その後風景から見られる日本の現代の文化や生活などの内容を先生が質問し、それに答え、さらに会話に広げていくというオーラルコミュニケーションのテストに向けてこの画像を使って、授業や練習した。難しかった点は、長く、多くの既習グラマーストラクチャーを使って学生に話させるということだった。写真の描写は短文で言えば、すぐに終わってしまうため、学習者はその写真から描写した文に加えて、日本の学校や文化について深く触れて話さなければならなかった。そのため、日本の制度や生活について、写真を使いながら、授業でも提示し、テストの際にいろいろな単語がとっさに思い出せるように絵や写真と一緒に載せたプリントを配ることも行った。

IV. 討論

A. まとめ

1. 自己が尊重される教育制度

自分の言葉で聞き、理解したいという思いから自分が聞きたいと思ったことについて、生徒はその都度聞いてくる。そして、教師はその都度答えなければならない。さらに、どうしてそのような質問を聞いてくるのかを、考えなければならない。これを瞬時に理解して答えることが出来るまでには時間がかかる。しかし、この質問をし、答えるという行動が自己表現の一種に値する。この表現するというを外国語でできるようになるために、生徒たちは日本語の授業を受けていた。

常に、自分が幸せかどうか教育を受ける上で生徒から一番重要視されていた。自分の興味のある

ることを自分の学びたい方法で、授業を受けにくる。学びを応援する側はそれに応えるために、さまざまな教材やトピック、学習方法を提案しなければならなかった。自分で授業選択ができることは、苦手な教科を避けるのではなく、将来の自分への知識の蓄積を深く掘り下げるために、学んでいることと自分を常にリンクさせていた。

2. 一緒に学び、つくる授業

教材や授業で配られるプリント1枚にも、生徒たちは意見を必ず言った。「このフォーマットは書きやすい」「字をもう少し大きくしてほしい」「プリントで覚えた単語を language perfect (*II) で復習したい」など、学ぶ上での授業スタイルや教室の机の配置にまでこだわった。同じ教室、机、椅子を使っていたが、それらの配置をクラスによって毎時間変えなければならなかった。

授業においては、リクエストと生徒のわがままとを判断し、yes, no をはっきり言わなければならなかった。授業に関係するリクエストであれば検討するが、楽をするために何度もアシスタントを呼び、他の生徒に聞きまわるような生徒には、昼休みに個別指導の時間を設け、平等に時間を作るようにしたことで、クラス全員で授業をつくれた。

3. アシスタントの仕事

長期実習に行くまでに、国内実習や海外短期実習を経験した。共通して言えることは、国や年齢、メインの教師の経験等から、求められる仕事は幅広い。よってアシスタントの第一の仕事として何を求められているかを理解し、自ら行動することである。何を求められているかが、分かる瞬間の1つに、生徒の反応である。表情や言葉の使い方、その生徒の性格などから、わずかな反応を見逃さないことである。

中等教育の学習者は、クラスの友人関係や他の教科の授業、成績などのさまざまな要因が、日本語の授業を受講する態度に表れることがある。一声かけて、それから授業が終わるまでの間にどんな変化があるのかを捉える。いつもと授業態度や問題正答率が違う場合、必ずしも「日本語の授業が難しい」という理由を鵜呑みにせず、接する必要がある。アシスタントは前で授業を行ったり、説明したりすることが少ない。その時間、すぐ前や横の席で起こっている生徒の行動や反応を細かく見ることができる。アシスタントの視線はメインの教師には伝わるが生徒からは見えにくい。その一瞬に見たものを脳に刻む積み重ねが、生徒を知り、生徒の要求に気づき、必要に応じて教師に伝えるというサポートへの大切な一歩なのである。

B. ティーチングアシスタントの心構え

1. 自分なりの先生像をもつこと

どんな先生が良くて、どんな先生が苦手な先生だったかを自分で把握しておく必要があった。課題を出されても、作る過程から、生徒に渡るまでにどのような試行錯誤があったらうか、毎回考えるようになった。不思議なことに、自分が今まで経験してきた宿題やテストを無意識のうちに見本として、課題を作ってしまうがちであった。どんなプリントの形にすれば、書きやすいだろうと考えた。

日本語は中等教育機関での、選択科目の1つとして扱われていた。クラスにいる学習者をいかに魅了できるかを、というのが中等教育機関においては重要な課題である。自分の中学生のとき、どんな先生の授業が人気だったらうか、ということ思い出してみた。教えることが上手な先生は、生徒の心に入っていくことが上手な先生だった。生徒の心に入っていくことが上手な先生は、授業の入り方にエンターテイメント性があった。

2. 臨機応変であろうと努めること

時間割が決まっても、当日の朝やお昼休みに急に行事の予定が入る。先生や時間割の都合で、自分の能力をはるかに超えた仕事を任されることが何度もあった。その時に、一番不安に感じているのは学習者だということを忘れてはいけない。先生が変わると、中等教育の学習者は自分の学びたいことが全て吸収できるのか、いつも通りの授業態度でいいのか、という不安が表情や態度にで

る。そのときに、教師を任されたアシスタントはいつも通りの雰囲気や授業形式を崩すことなく、行われなければならない。メインの先生のレベルと同じ授業をできることが理想だが、そうはいかない場合もある。その時でも、先生を演じなくてはならない。

そういったことの積み重ねが、生徒や他の先生から信頼される材料となる。生徒に一生懸命授業に取り組んでもらいたいときは、自分がいつも以上に一生懸命授業を行う。生徒の様子を見て、その時間の授業の流れを考えていかなければならない。予定調和でつらめかれた授業は先生からすれば満足に感じることもあるだろうが、生徒のほとんどは、満足しない。自分が分からないと思ったことをいつでも質問したい、納得するまで次に進めない、そのような生徒たちから質問があったときは、授業を中断する、または質問の時間を設けたり、次の授業で復習させたりと、生徒が満足するような授業をその時々で提案していかなければならない。

3. なるべく先入観をもたないこと

授業は、こうあるべき、生徒はこの方法で学習するのが当たり前、という先入観を誰しももっているだろう。しかし、その環境や方法がベストという訳ではない。それ以上のものを見つけることが教師やアシスタントの仕事に1つに含まれているのではないだろうか。同時に、他国の学習者には、特に配慮が必要である。授業のルールは、はっきりと伝えなければならない。しかし、授業中椅子にずっと座って学習することが困難な生徒もいた。無理やりルールを教え込むのではなく、生徒の中にある授業中のルールなどを理解するように努める。教師は学習者と同じ目線で物事を見ること、俯瞰して教室を見ることの双方が必要である。

また、学習者にありそうな回答を求めないことである。学習者が既習の文型で文を作ったり、スピーチ原稿などを考えたりするときには、他の人が絶対言わないだろう、と思う文章を作ることがある。文法的に間違っている以外のことは、本人の世界観を大切に、さらに表現の幅を広げられるような指導をする。

4. 生きた教師が最大のリソース

アシスタントと先生が話す言葉そのものが、学習者にとっては教材である。日本に行って、もしくは日本人に会って話す機会があれば、自分の言葉が通じる、会話ができる、自分の書いた文字が読んでもらえる、という喜びが学習者たちの最高の成績表示となるだろう。そのために、普段使っている言葉遣いや板書はとくに、注意が必要である。イントネーションや書き順、文字の大きさ、など全てが教科書として記録されるという程度の緊張感と意識を自身の発する日本語に持っていないなければならない。

C. 今後の課題

今までの活動から、いくつかの課題を提案する。まず1つは、アシスタントとして中等教育に行く学生が、現場で使われている教材を知っておくことである。教科書やワークブックではなく、その他の教材を使って授業を展開ということを予測した、国内実習や活動をする。そして、その副教材の提案なども考えられる。

そして、国や学校ごとの教育制度で求められていることが異なる。そのために、どのような教え方や授業展開をしなければならないか、ということを学校ごと、もしくは経験したアシスタント各々が授業シラバスを軸に内容を詳しく記述したレポートのような形で残すことを提案する。それらの記録によって引き継ぎが可能になり、次のアシスタントに繋がり、自身のフィードバックを責任もって形にできるのではないだろうか。

ニュージーランド滞在中、生徒から「なぜ日本では便利で速いことが良いことなのか」と尋ねられて、答えられなかった。自分が当然と思って今まで過ごしてきた世界観や文化を揺り動かされるような体験、それが外国で日本語を教えるという経験の異文化を生きる根幹にある。学びの場を準備することが自分にとっても最大の学びの場となる。それが日本語ティーチング・アシスタントの現場だった。これからも、この経験を活かして生活をしていきたい。

謝辞

この度、「学習者の視点から提案する日本語学習」をテーマとした卒業論文を作成するにあたり、多くの方々にお世話になりました。中等教育機関での短期・長期アシスタントで大変お世話になった古別府先生、クイーン・マーガレット・カレッジで受け入れ、丁寧に指導していただいた福家先生、学校関係者の方々、そして私に貴重な経験を積ませてくれた生徒のみんなにお礼を申し上げます。そして、卒業論文のご指導を下さった安溪遊地先生、安溪貴子先生、本当にありがとうございました。今回の研究を取り上げるにあたって、自分の大学生活やこれまでの経験を振り返るによって私自身の世界観が大きく変化しました。何より、学習者となった生徒に私が教えることよりも、学ぶことの方がたくさんありました。

そして、私が出逢えた素敵な方々にもう一度会える日を心から楽しみに、これからの生活に励みたいと思っております。

引用文献

- 青木直子 (2001) 「教師の役割」, 『日本語教育学を学ぶ人のために』 青木直子・尾崎明人・土岐哲編, 世界思想社, 182-197.
- 牛窪隆太 (2004) 『WEB 版リテラシーズ、日本語教育における学習者主体ー日本語話者としての主体性に注目して』, くろしお出版, 27.
- 梅田康子 (2005) 『学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割ー学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る』, 74-75.
- 尾関史 (2007a) 「早稲田大学日本語教育実践研究、学習者の主体性を活かした授業に向けてー学習者と教師の視点から捉える学習者主体」 『日本語教育実践研究』 第6号, 185-192.
- 尾関史 (2007b) 「主体的な自己実現を目指す年少者日本語教育に向けてーある外国人児童への日本語支援からの気づき」 『早稲田大学日本語教育学』 第1号, 21.
- 金谷憲 (2002) 「自己表現活動のハードルとその乗り越え方」 『英語教育』 10月号, 8-11.
- 田尻悟郎 (2009) 『(英語) 授業改革論』 教育出版, 80-82, 143-144.
- 平畑奈美 (2009) 『海外で活動する日本人日本語教師に望まれる資質の構造化』
- 横田淳子 (2003) 『外国人児童に対する日本語教育のあり方』 東京外国語大学留学生日本語教育センター論集 No29
- 横溝紳一郎 (2011) 『日本語教師のための TIPS77① クラスルーム運営』, くろしお出版, 85-87.

引用ウェブページ

『ニュージーランド教育概要』

<http://nzi.juryugaku.com/nz%E5%9F%BA%E7%A4%8E%E7%9F%A5%E8%AD%98/%E3%83%8B%E3%83%A5%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%E6%95%99%E8%82%B2%E6%A6%82%E8%A6%81>

注

I. フラッシュカード

学習教材で、単語や数字、絵を書いたカード。学習者に短時間見せて、反応速度を向上させる練習をする。早期教育などで用いる。

II. Language perfect

クイーン・マーガレット・カレッジで導入されていた言語学習の方法。パソコンで自分が学習している言語を選択し、授業で学ぶ単語の音声やスペル、意味を確認できるオンライン学習。1つの日本語の単語が、画面に出て10秒以内に英語で意味を答える。その逆も可能である。時間以内に正しく答えられることを目標としており、取り組んだ回数が何回、何時間、点数が高い生徒は誰かなどが、教師が教室の外での生徒の学習の様子を把握できるようになっている。